

追想・内山秀夫君

内山君と初めて出逢ったのは、昭和三五年（一九六〇年）の春浅く未だ寒さが身に沁みる頃、塾監局三階の会議室前の廊下に一脚だけ置かれたベンチに並んで座つたときだった。二人とも、法学部副手に採用してもらつための面接試験を待っていたのである。私は緊張しきつていて、黙つて前を見据える形で座つていたが、隣りに脚を組んで本をバラバラとめくつていた男が、その本をパタンと閉じて、「おまえは何の専攻だ」と話しかけてきた。私が「商法だ」と答えると、その男は「フン」という顔をしてから、「俺は政治理論だ」と昂然としていった。その男が内山秀夫だった。

人の記憶はいい加減なもので、その気がなくても本人自身が作り変えてしまうことが大いにありうるから確かだとはいきれないが、その時の内山君の「おまえは」という私に対する第一声には、何だか「オメエサンハ」といつているようなニュアンスがあつたように思う。い

ずれにしる、こいつは私のような甲州の山猿とはちがつて、江戸っ子で、しかも肚の据わつた男に違いないという第一印象をもつたことだけは確かである。

二人ともその時の試験にはめでたく合格し、内山君のアメリカでの研究生活の事情で就任時期は一年くらい違つたが、法学部での副手同志として年中いっしょに暮らすようになり、夜は矢鱈に酒を呑んだ。大抵は二人だけで、初めは比較的静かに、やがては政治や法のあり方——特に理論的・理念的なあり方——についての高声での罵倒の掛け合いを肴に、安くて美味しい酒に溺れ合つた。

第一印象に間違ひはなくチャキチャキの江戸っ子だつた内山君が私にとり酒の先達であつたが、ある時、当時の私の住居の近くにあつた行きつけの小じんまりしたスタンド・バーに初めて私が彼を案内し、例によつて例の如く酒に溺れて別れてから、しばらくして一人でその店に私が行つたとき、店のマダムとバーテンダーが二人雁首を揃えての御挨拶の、余りの意外さに魂消てしまった。彼等は、「先夜は私どもの店に何か不行届きがございましたでしょうか。御指摘をして戴ければ謝罪もいたします。以後気を付けるようにいたします。」というの

である。私は何のことも全く判らず訊いてみると、「お客様があの様に激しく喧嘩口論をなさって、何かこちらに落度があったのではないか」とのこと。実は、その夜はいつも以上に二人で盛り上がり、充実感により上機嫌で店を出たのである。

ただ、互いに、「そんなことを考えるくらい馬鹿野郎なら、サイト サイト サクラガサイトからやり直すか、店の前のドブに飛び込まえ」などという合うのを傍から聞いている人にとっては聞きづらい喧嘩口論と思ってしまうのが当然のことかも知れない。酒の上のこととはいえ、自戒の余地・必要性はこちらにある。強いて弁解をすれば、不器用な同期の桜が、対象となる分野こそ違え、お互いに学問を志し、学理を自分なりに思惟し尽くそうとしていることを、傷を舐め合うのではなく、確認し合おうとしているのである。

私には、世に公然たる一つの恥がある。というのは、英語が全く判らないのに、翻訳論文を一編公刊していることである。それは、ヘルベルト・マルクーゼの編によるフランツ・ノイマンの論文集(『政治権力と人間の自由』一九七一年河出書房新社)なお、再版以後は『民

主主義と権威主義国家』と改題)の中の第二章「近代社会における法の機能変化」である。

なぜ私がそんな無謀なことをあえてしたかといえは、主訳者であった内山君が、原著の中のこの部分のコピーをわざわざ私の許に持ってきて、翻訳を命令したからである。もちろん、私は最初は断った。しかし、彼は「まあ読んでみて、おまえさんのノートのつもりで日本語の文章にしろ。」といって、分厚いコピーの束を置いていった。仕方がないから辞書と首っ引きで読み始めてみると、文字どおり眼から鱗が落ちて行く思いがした。

私は、若い時特に、グスタフ・ラートブルフの法理論に傾倒していた。周知のように、ラートブルフは、一九世紀的法実証主義を批判する新カント派の驍将の一人である。しかし、ラートブルフは、彼の価値相対主義から、多数決原理にもとづき定立された法の効力の安定性を法的価値の首位に据えるのだが、そのことは、果たして理念的な法実証主義批判になるのかという点が、私には判らなかつた。もとよりラートブルフのいう法的安定性は、法の支配イコール人間の自由というカントの思想に通ずるものであつて、それゆえにこそ彼は新カント派であり

うる。

ところが、ノイマンによれば、「もし、カントの法理論が、彼の倫理学から離れて検討されるとすれば、自然法がそこから完全に姿を消していることがわかる」（拙訳・前掲書五四頁）。実は内山君は、このあたりを読んでいた私に命令をしたのではないか。誠に、「友を選ばば書を読みて」である。

名誉教授 倉澤康一郎

内山先生の比較政治学

鋭い視線とともに、胸に突き刺さる言葉を次々と発する人。これが、一九八〇年代後半に内山ゼミの学生であった私の内山秀夫先生に対する印象だ。しかしながら、先生が伝えようとしていたことの全体像は、不出来かつ不真面目な学生であった当時の私にはよくわからなかった。「この人は（思索的な意味で）何かと格闘している」と断片的に肌で感ずるばかりで、それを体系づけて理解することはできなかった。その後私は縁あって二〇〇四年より義塾で比較政治学（比較地域研究論）を担当することになったが、この追悼記事執筆を機に、内山先生が比較政治という学問分野で何と格闘していたのかについて考えてみたい。

比較政治学は、アメリカでの政治学研究を中心に第二次世界大戦後に生まれた学問分野である。社会科学の最先端の研究分野への助成をおこなう社会科学研究評議会（SSRC）が一九五四年に「比較政治委員会」を創設し

たことと前後して、比較政治学は政治学の一分野として確立してゆく。その最大公約数的な定義は、世界各国の国内政治を理論枠組を用いて実証的に分析する研究分野となる。内山先生は一九五九年提出の修士論文「アメリカ政治学にかんする一考察―特に比較政治学を中心に―」以来、この分野で多くの論文・著書・翻訳を発表されているが、ここでは、一九六〇年代からの比較政治に関する主要論文を集めた『比較政治考』(三嶺書房、一九九〇年)を中心にみてゆくことにする(以下引用頁数はすべて同書より)。

『比較政治考』全体を通じていえることは、その分析者が一次資料などに基づいた実証分析ではなく、他の研究者の分析を基にした「分析の分析」となっている点である。内山先生はいわばメタ理論家であった。では、理論家として先生がこだわっていた問題は何であったのだろうか。『比較政治考』から浮び上がってくるのは、戦後のアジア・アフリカでの新興諸国の台頭をうけ、同時代の政治状況はどう理解できるだろうか、という問題意識である。これは例えば、次のような指摘に端的にみられる。「現代は、かつての世界が先進西欧諸国によつての

み構成されていたのとは異なり、まさしく文明が接触し、その意味であらゆる人間が人類「傍点原文」として平等に世界を構成した、人間の歴史において未曾有の時代である」(一六九頁)。先生は、日本の知識人の多くがその思索の基礎を西欧を対象とした分析に置いていた時代に、新興諸国のつきつけた問題をいち早く、かつ深く考えた学者のひとりであったといえるだろう。そして、この問題を考えるにあたって検討されるのが、ブラックやアイゼンシュタットの近代化論、アーモンドの政治システム類型論、パイの政治発展論、ハンチントンの政治制度化論など、当時の比較政治学をリードしていた一連の研究者たちの理論であった。

内山先生によるこれら理論の検討は、理論それ自体の論理的整合性や妥当性の考察だけにとどまらず、現代世界の構図を含意として描き出す。先生によれば、「第三世界」の出現以前には国家の存在が所与のものとされ、人間は「国民」として国家と結びついていると想定されていた。これに対し、新興諸国は実はそうではないさまざまな結びつき方があることを我々につきつけ、人間は政治の世界における主体の位置を取り戻した。換言する

と、「人間のいとなみとしての政治」の可能性が開かれたのである。また、新興諸国の登場により、民主主義のあり方も変化した。すなわち、民主主義は「国家をも否定する可能性をもった政治原理」となり、さらに政治学は「それがどこの地点で社会の統合原理として作動し、個人を社会につなぎとめるか」（三〇一頁）を模索しなければならなくなった。

比較政治学を起点とする先生の思索は、戦後日本の姿にも投げかけられる。新興諸国において「人間のいとなみとしての政治」が噴出したことに比べ、日本の戦後は、「民主主義の国家化」（三九八頁）を特徴としていた、と先生は喝破する。すなわち、日本における「民主化」の実相は、戦前すでに成立していた「國家的外装をぬぎかえる作業」（三九八頁）でしかなかった、というのである。

同様の秀逸な同時代分析をすべて挙げる紙幅はここにはないが、要するに、内山先生にとつての比較政治学とは、根源的（ラディカル）な問題、特に、同時代の政治状況を考える際の出発点であり、かつ自らの考えを相対化する立脚点であったといえるだろう。私が義塾に就

職した年の四月に先生から頂戴したお手紙には、「もう三〇年も前に比較政治学はラディカルネスを失ってしまいましたね」とある。比較政治学を専攻する者として、耳の痛い指摘である。断片化された政治現象を対象にして実証性を追及する傾向の強い最近の研究状況において「内山先生の比較政治学」をいかに取り込めるか、これを今後の自分の課題としたい。

法学部准教授 粕谷 祐子

福澤研究センターにおける 内山秀夫先生

私は学部・大学院を通じて法学部にも先生のゼミナールにも無縁に過ごし、また政治学は不勉強、しかも学校を出てから永い間地方にいたから、学者としての内山先生の業績や法学部教授としての先生のご活躍について語る資格は全くない。単なる個人的な思い出に終始する失礼をお許し頂きたい。

私が先生に親しくご指導をいただく機会を得たのはずっと後になってからであるが、先生のお名前を意識したのはかなり早く、昭和四〇年の春休みの最中、三年生に進級する前に一度校舎を見て置こうと思つて三田を訪れ、ふと生協の書籍売り場に入った時のことであつた。新学期を前にして多くの教科書が平積みになっていた中に、アイゼンシュタットの近代化論のプリント版の薄いパンフレットがあつたのを偶然見つけて購入した。その山に付けられた札に「法学部内山秀夫先生」とあつたのを目にしたのである。他学部の学生であつたから、その講

義を受講しようと思つた訳ではなく、何となく「近代化論」という表題に惹かれたまでのことであり、先生のお名前も直に忘れてしまつたと思う。

それから一〇年近くたつて、私はもう一度内山秀夫というお名前を、今度は有斐閣の宣伝パンフレット「書齋の窓」誌上で、多くの社会科学者が学生時代の思い出を書いておられる中に発見した。地方の学校で友人も少ない寂しい思いをしていた時であつたから、義塾大学院社会学研究科で私も教えを受けた米山桂三先生の思い出などを読み、ねずみ色のパンフレットを懐かしく思い出した。

そんないきさつがあつたから、何年か後に福澤研究センターのお手伝いをするようになり、始めてお眼にかかつた時も、古い知り合いに邂逅したような気がして嬉しく、気楽に調査などを一緒にさせていただいた。センターの設立の当初であつた当時、先生は恩師であられた石坂巖先生をはじめとして、各学部から長老教授を次々と所長に迎え、ご自身はその許で永く副所長として実務を担当され、研究所としてのセンターの活動の基本路線の確立に努めておられた。そのために「福澤門下生の地方

での活動」。「近代日本におけるリベラリズムの研究」など、幾つかの共同研究のプロジェクトを主催され、それがその後のセンターの基本的な研究方法になった。その際に先生が貫かれた理念は、センターをできるだけ「開かれた」研究機関として国内外の学者の利用に供し、福沢および近代日本研究の一大中心にするという、気宇壮大なものであった。

その後、先生は慶應義塾の御定年を前に、新潟に新しい大学を創設する仕事に没頭されるようになり、センターの管理は後輩に当たられる西川俊作先生へ引き継がれ、西川先生の御発病後は坂井がお預かりするようになったが、中年を過ぎてからの「帰り新参」であった私は学内の事情に疎く、そのためセンターの運営に関して戸惑うことがしばしばであったが、その都度まず内山先生のご助言を仰いで問題を解決していた。時には先生が東京のお宅に帰られるのを待ち切れずに、新潟のアパートにまでお邪魔してご教示を乞うたこともあった。そうした場合先生は、すでに退職した人間が以前の職場の事に口を出すのは好ましいことではないと前置きされながらも、義塾の要所要所に持つておられた豊かな人脈をたどって、

適切なアドバイスをくださるのが常であった。一見すると磊落で時に豪放にも見え、またいたずら好きなやんちゃ坊主の様な一面すらあったそのお人柄の背後には、細やかで緻密な心配りが隠れていることがよく理解された。その意味で先生は足腰の脆弱な私にとっては、かけがえない杖でありまた柱でもあった。

私の頼りないことをよくご承知になった先生は、お目にかかる度に、福澤センターを外に閉じた研究所にしてはならない旨をお諭しになったが、微力な私はそのご期待に十分にはお応えできないことを恐れるのが常であった。それは学界に広い人脈を持たれる内山先生にして始めて可能であるように思えた。しかし幸い私が退いた後は小室正紀所長、また小室さんの後は米山光儀所長のご活躍により、センターは着々と体制を固め、先生が望まれた方向にむかって確かな歩みを続けているように思われる。それを見て在天の霊も心を安ぜられることであろう。

この一、二年、私達は先生のご病状の篤いことは承知しながらも、素人の悲しさで為す術もなく、唯々奇跡を信じて一縷の望みを託すしかなかった。三月二三日、ご

入院先をお見舞いした時も、話柄は福澤センターの将来に関する事柄に終始し、センターに寄せる篤い想いがひしひしと伝わってくる三〇分間であった。その時はそれ程差し迫っているとは思えなかったが、ご容態の急変により四月六日、再びお声を聞くことができなくなってしまうのは痛恨の極みであるが、一足先に旅立たれた恩師石坂巖先生とお逢いになり、談笑されるお姿が彷彿とするのがせめても慰めである。

合掌。

名誉教授・帝京大学教授 坂井達朗

白紙の葉書

お通夜が終わった後、「白紙の葉書」を内山先生の奥様の富美子さんからいただいた。葉書の表にはいつもとは違って、乱雑に私の住所と氏名だけが書かれ、裏には何も書かれていなかった。

例年、冬になると広島の牡蠣を先生に送っていた。亡くなられた二〇〇八年の一月に先生から礼状をいただいた。

「カキのご恵送にあずかりました。篤く御礼を申し上げます。早速家人が茶碗蒸しに仕立ててくれました、少し熱目にできたので、ほう、と息を少し吹きかける思いで頂戴しました。おいしゅうございました。至福の時間でした。ありがとうございます。」

先生はやつとのこととで、これだけのことを書かれたに違いない。

その前年、二〇〇七年の一月、内山先生からいただいた葉書が手元にある。

『カキ』有難うございました。年頭、少し体調が崩れ寝たり起きたりをしていましたが、どうやら気候の変調に関係があるようです。問題なのは気力・体力が衰えたことで、翻訳に手をつけるところに及ばないのはいささか口惜しいことです。貴君はこれから見るべきものを見るわけですから、余りあせらないように。妙に力むと却って見えるものも見えなくなりますから。ともあれくれぐれもご自愛の上、御研鑽のほどを。忽々」

二〇〇七年の三月に内山先生の喜寿をお祝いするために、先生の教えを受けた者たちが『現場としての政治学』（日本経済評論社）を出版した。先生の健康が芳しくないので急いで出版しようという話になり、同期の北九州市立大学の中道寿一君が出版社を探し、編集の労をとってくれた。四月には内山ゼミOBのみなさんが会を企画されたが、先生は欠席された。会の翌日、一つ学年が先輩の柴田平三郎さん（獨協大学）、梅垣理郎さん（慶應義塾大学）、中道君と一緒に自宅にお伺いした。先生は意外に元気がよかった。「近くの郵便局に自転車で行けなくなった」、「歳をとるとエッセイを書いておくとよい」、「石川真澄さんが自分で返事は書けないのだが、

手紙をもらおうとうれしかったらしい」というような話をされていた。

その後、先生の奥様と何度か連絡を取り、〇八年の二月にお会いする予定であったが、先生の健康がすぐれずお会いできなかった。柴田さんから一度お見舞いに行っておいた方がよいという電話があり、急遽、三月三〇日に病院にお見舞いに伺った。病室に入ると、少し私の方に目を向けられたが、すぐに目を閉じられた。ベッドのそばに座り、先生と初めて出会った頃のことを思い起こした。

先生の講義をとったのは博士課程一年（一九七三年）、初めて設けられた政治思想部門の「合同演習」であった。この演習には石井良博、多田真鋤両先生も出席されていた。演習は教員と一一名の院生が全員報告をする形で進められた。内山先生はその時の成果をシンポジウム「政治的自由」としてまとめられ、院生の知的レベルと知的生産を明らかにしようと考えられた。『法学研究』四六巻一号の「政治的自由」の中で、先生は博士課程に在籍する院生に向けて次のようなエールを送られている。

「われわれのアカデミーは院生諸君を研究者として、

だから同僚として確実に承認している。その証明を院生諸君がみずから担当することは、院生諸君の責務であるはずである。私は合同演習を機会として、院生諸君の知的品位がいよいよ高揚することを確信する。」

翌年から、博士課程に在籍する院生も『法学研究』に論文を指導教授と連名ではなく単独名で執筆できるようになった。柴田さんがその第一号であり、私がそれに続いた（なお、現在では博士課程在籍の院生のために『法学政治学論究』が刊行されて、この制度は廃止されたそうである）。

同じ頃にもまったく話をしたことのなかった法学研究科科長石川忠雄先生に、私は一人で面談を申し込み、もつと大学院の教育体制を整えて欲しいとかけあったことがある。内山先生が私のことを随分心配されていたということを知ったのは、少し経ってからである。

演習が終わってから先生を囲み、お酒を度々飲んだ。メンバーは内山ゼミの出身者とゼミではない柴田さん、梅垣さんや私であった。学部時代、米軍資金問題を通じて「学問は何のためにあるのか」「大学とは何か」というような問題をまじめに考えてきたせいか、それとも将

来の展望が見出せなかったせいなのか、陰陰滅滅とした酒席であった。先生は院生に無理やり歌を歌わせた。内にこもってしまいがちな院生を外に引っ張り出そうとする先生一流のやりかたであった。

先生には、院生の時代にはシェルドン・S・ウォーリン『ホップズと政治理論の叙事的伝統』（未来社）を出版する機会をいただいた。私と同じように出版社を紹介してもらった、先生のゼミ以外の院生や研究者は数え切れない。

大学院を終わる頃、現在勤務している広島修道大学に新設される法学部への就職の話を持ってきていただいたのも内山先生である。先生の友人である大賀祥充先生が修大におられ、私が同じ学校法人にある修道高校の出身者であったからである。

先生は一九九四年に慶應義塾大学の選択定年制を選ばれ、新潟国際情報大学の初代の学長に就任された。二年後、私は広島修道大学の学長に選ばれ、今までとは違った話をするようになった。二期目が終わる頃、もう学長を終わりにして一教員に戻りたいという手紙を書いたら、まだ続けたらという手紙をいただいた。予想に反した答

えであった。研究者よりは大学の経営に私の適性があると判断されたのかもしれない。学長の任期が終わった三年後、学長候補になったのだが、自分の研究をまとめたという理由で候補を辞退した。その報告を先生にしたから、既述の「妙に力まないように」という葉書をいただいた。内山先生にその意味をお聞きしたいと思いつながら、とうとうそのままになってしまった。

広島修道大学教授 市川 太一

政治学者 内山秀夫先生

入学時に新一年生に配布される『塾生案内』が改題され、今日カラムス・グラディオ・フォルティオルと呼ばれているその冊子の一九九〇―九二年度版の巻頭に内山先生の「福澤先生という人」が掲載されている。

福澤先生を「人」と呼び、「書を捨てよ」と書き出される内山先生の新入生へのオリエンテーションの言葉に導かれて進路を決めていった塾生がどれほどいたのかを今確かめることは出来ないが、少なくとも内山先生にはそのオリエンテーション役が委ねられていた。私は当時内山先生御自身が名実ともに慶應義塾を一身に担う今と違うものを自覚されていたことを証言出来る者の一人であり、先生は続いてその全精力を新大学の設立に向けられることとなった。

新潟国際情報大学初代学長としての内山先生については、その創設以来先生を支えられた石川真澄氏などからお話が伺えれば一番良いと思えるが、残念ながらその石

川氏も数年前に鬼籍に入られた。学長職を終え一九九八年東京に戻られてからの内山先生は、東京都民カレッジで市民講座を担当されたりする一方で、知的活動のレファレンスを日本の近現代史に求められ、二〇〇一年にはまずヒュー・バイアス著『敵国日本』(原書一九四二年)を翻訳された。

以後毎年一冊ほどの勢いで翻訳また『與謝野晶子評論著作集』(二〇〇三年)の編集・解題の仕事が続けられた。そうした活動のなかで、私は先生が二〇〇六年に日本経済評論社から『増補 民族の基層』を出版されたことが『いま現在』人間がおかれている『歴史の現実』と直接格闘(前記「福澤先生という人」)する政治学者としての先生御自身の意思表示明として、強く印象に残っている。

一九八三年に三嶺書房から出版された初版の『民族の基層』には、琉球大学で政治学原論の集中講義をされたことを契機として、また色川大吉氏、石田雄氏らと共に行なった不知火海調査を契機として執筆された沖繩、水俣に係る主として一九七〇年代に執筆された文章が収録され、さらに書名と同じ「民族の基層」との論文(『世

界』一九八二年一月号)が収録されていた。この初版に収録された「民族の基層」と増補版に収録された「民族再考」(『法学研究』一九八四年一月号)との間には、発表時期では二年間ほどの時間の開きがあるだけだが、内容的には大きな質的な変化が見られるように思う。

一九七〇年代の半ば指導教授の内山先生がわれわれ大学院生が国家という言葉で議論しているなかで、M君だけが統治という言葉を使った際、そのM君を「それが政治学だ」と褒められたことを覚えている。国家という言葉で議論していた自分たちをひどく恥じたわけだが、『増補 民族の基層』に収録された「民族再考」のなかで先生は統治とか政府ではなく、国家というキーワードによって「人間の営為の先端にとりつくことが」出来るのだ、と語っておられる。

「国家問題は、私には、戦後史の未完の問題として持続しているとは思えない。そして、国家問題は、人間の自由に表示する意志及び希望の次元として、現在、もう一つの時期をむかえているのではないか。さらに、それは、あるいは、戦後世界が構想された時の国家とは、まったく異質の位相を人間史にもちこもうとしているの

ではないか」と。

民主主義が制度化され、「政府」理論となる時、「理性」そのものが問われることのない合理性に貫徹されることになる」。この抗うべき対象としての「政府」理論に対して、「国民に接合する民族」を持ち出せば、「たちまちにしてその営為は国家に吸いあげられてしまう」のであり、その方向性を断ち切る道として、エスニシティに拠って立つ多元的社会的確立を主張される。

その限りで先生の論文は先生が語られる通り「現代世界にあって流動している人間の状況を、『社会』との関連で切ろうと試みた」もの、つまり「社会」を問題とするものであった。そうした議論は既に初版の『民族の基層』で読むことが出来るが、そこから翻って「社会」を問題にすることが「民族」へ、「国家」へと作用してゆく側面が増補版では「現行の国民形成の原理としての『民族』の意味内容の転換をはかることで、国民の形質を転換し、ひいては国家の規定者としての個人を確定する」という『歴史的現実』との格闘に挑む姿勢として、鮮明に語られることになる。

同じく『増補 民族の基層』では金石範著『在日』の

思想』の書評のなかで、「民族は、かくて私たちの現在を歴史の創造に結ぶ、連結環の位置にある」と述べておられる。国家とその国家を満たす国民、民族を議論することで「現在」と「歴史」を結ばんとする、先生の「人間の営為の先端」への執念は、先生のゼミから多くの優秀なジャーナリストが輩出していることと無縁ではないように思える。

内山先生は、先生のお嫌いな言葉であった弟子たち、その弟子たちからは最後まで「こわい」存在であった。その「こわさ」は、教師たることにこだわり続けた先生ゆえのものだったと思う。追悼文としては誠に異例のものとなったかも知れないが、内山ゼミ三期生の一証言として拙文を御霊前に捧げたいと思う。

商学部教授 小野修 三

内山秀夫先生 略歴

- 一九三〇年（昭和五年）二月十三日 東京市に生まれる。
- 一九五三年（昭和二十八年） 慶應義塾大学経済学部卒業。
- 一九五八年（昭和三十三年） 慶應義塾大学大学院経済学研究科中退後、慶應義塾大学法学部政治学科卒業。
- 一九六一年（昭和三十六年） 慶應義塾大学大学院法学研究科修士課程進学、博士課程を経て、以後助手、専任講師、助教授を経て、慶應義塾大学法学部教授就任。
- 一九七三年（昭和四八年） 慶應義塾大学法学部教授就任。
- 一九八三年（昭和五八年） 学生部大学生生活懇談会委員長などを歴任。
- 一九八八年（昭和六三年） 慶應義塾福澤研究センター創設とともに、同センター副所長。
- 一九九四年（平成六年） 三月末 慶應義塾福澤研究センター所長就任。
- 四月一日 慶應義塾を退任。
- 一九九八年（平成一〇年） 三月末 新潟国際情報大学初代学長就任。
- 二〇〇八年（平成二〇年） 四月六日 新潟国際情報大学退職。
- 日野市立病院にて逝去。（享年七八歳）

内山秀夫先生 主要著作目録

一、編著書

- | | | |
|-------------------|----------|-------|
| 『現代社会と政治体系』(共編著) | 時潮社 | 一九七〇年 |
| 『政治発展の理論と構造』 | 未來社 | 一九七二年 |
| 『第三世界と現代政治学』 | れんが書房 | 一九七四年 |
| 『現代政治学の基礎知識』(共編著) | 有斐閣 | 一九七五年 |
| 『政治学を学ぶ』(共編著) | 有斐閣 | 一九七六年 |
| 『デモクラシーの構造』(共編著) | 日本放送出版協会 | 一九七六年 |
| 『政治思想史の基礎知識』(共編著) | 有斐閣 | 一九七七年 |
| 『政治文化と政治変動』 | 早稲田大学出版部 | 一九七七年 |
| 『政治学における現代』 | 三一書房 | 一九七九年 |
| 『政治における理想と現実』 | 三一書房 | 一九八〇年 |
| 『政治学への発想』(共著) | 三一書房 | 一九八〇年 |
| 『民族の基層』 | 三嶺書房 | 一九八三年 |
| 『国際人の条件』(編著) | 三嶺書房 | 一九八四年 |
| 『一五〇年目の福澤諭吉』(共編著) | 有斐閣 | 一九八五年 |
| 『昭和同時代を生きる』(共編著) | 有斐閣 | 一九八六年 |

- | | | |
|-----------------------------|----------|-------|
| 『講座政治学』全五卷（共編著） | 三嶺書房 | 一九八六年 |
| 『日本の政治環境』 | 三嶺書房 | 一九八八年 |
| 『比較政治考』 | 三嶺書房 | 一九九〇年 |
| 『政治的なものの今』（編著） | 三嶺書房 | 一九九一年 |
| 『私立の立場から』 | 日本経済評論社 | 一九九四年 |
| 『政治は遂方に暮れている』 | 日本放送出版協会 | 一九九四年 |
| 『グローバル・デモクラシーの政治世界』（共編著） | 有信堂高文社 | 一九九七年 |
| 『政治と政治学のあいだ』 | 日本経済評論社 | 一九九八年 |
| 『福澤諭吉と長岡藩』（福沢記念選書六三） | 慶應義塾大学 | 二〇〇〇年 |
| 『與謝野晶子評論著作集』全二二卷（共編） | 龍溪書舎 | 二〇〇三年 |
| 『増補 民族の基層』 | 日本経済評論社 | 二〇〇六年 |
| 二、翻訳 | | |
| S・M・リップセツト著『政治のなかの人間』 | 東京創元新社 | 一九六三年 |
| B・E・ブラウン著『比較政治学の新動向』 | 慶應通信 | 一九六七年 |
| D・E・アプター著『近代化の政治学』上下 | 未来社 | 一九六八年 |
| C・E・ブラック著『近代化のダイナミックス』（共訳） | 慶應通信 | 一九六八年 |
| S・M・リップセツト編『学生と政治』（共訳） | 未来社 | 一九六九年 |
| S・N・アイゼンスタット著『近代化の挫折』（共訳） | 慶應通信 | 一九六九年 |
| I・デ・ソラ・プー編『現代政治学の思想と方法』（共訳） | 勁草書房 | 一九七〇年 |
| R・A・ダール著『民主主義理論の基礎』 | 未来社 | 一九七〇年 |

- F・ノイマン他著『政治権力と人間の自由』(共訳)
 河出書房新社 一九七一年
- S・M・リップセット著『国民形成の歴史社会学』(共訳)
 未来社 一九七一年
- E・E・シャットシュナイダー著『半主権人民』
 而立書房 一九七二年
- B・クリック著『現代政治学の系譜』(共訳)
 時潮社 一九七三年
- H・ユーロー著『行動政治学の基礎』
 東海大学出版会 一九七五年
- J・オールマン著『創造の政治学』(共訳)
 而立書房 一九七六年
- L・W・ミルブレイス著『政治参加の心理と行動』
 早稲田大学出版部 一九七六年
- R・T・ホルト著『比較政治の方法』(共訳)
 勁草書房 一九七六年
- W・J・M・マッケンジー著『政治と社会科学』(共訳)
 未来社 一九七七年
- クレスビー、マイノウグ編『現代の政治哲学者』(共訳)
 南窓社 一九七七年
- S・ハンチントン著『変革期社会の政治秩序』上下
 サイマル出版会 一九七七年
- F・ノイマン他著『民主主義と権威主義国家』(共訳)
 河出書房新社 一九七七年
- (なお同書は一九七二年刊行のF・ノイマン他著『政治権力と人間の自由』を改題したものである。)
- パリーン、ヒューズ、ピレンヌ著『歴史における科学とは何か』
 三一書房 一九七八年
- ダール、タフティ著『規模とデモクラシー』
 慶應通信 一九七九年
- A・レイプハルト著『多元社会のデモクラシー』
 三一書房 一九七九年
- D・R・シーガル著『デモクラシーの政治社会学』(監訳)
 早稲田大学出版部 一九八〇年
- G・A・アーモンド著『現代政治学と歴史意識』(共訳)
 勁草書房 一九八二年
- J・リンツ著『民主体制の崩壊』
 岩波書店 一九八二年
- ハリソン著『ブルーラリズムとコーポラティズム』
 勁草書房 一九八三年
- グレイザー、モイニハン編『民族とアイデンティティ』
 三嶺書房 一九八四年

- マックファーソン他著『国家はどこへゆくのか』（共訳）
御茶の水書房 一九八四年
- C・ベイ著『解放の政治学』（共訳）
岩波書店 一九八七年
- R・A・ダール著『経済デモクラシー序説』
三嶺書房 一九八八年
- J・ロスチャイルド著『エスノポリティクス』
三省堂 一九八九年
- S・N・アイゼンスタット著『文明としてのヨーロッパ』
刀水書房 一九九一年
- アダム・プシエヴォルスキ編著『サステナブル・デモクラシー』
日本経済評論社 一九九九年
- M・ベアー他編『アメリカ政治学を創った人たち』（監訳）
ミネルヴァ書房 二〇〇一年
- ヒュー・バイアス著『敵国日本』（共訳）
刀水書房 二〇〇一年
- A・ギャンブル著『政治が終わるとき？』
新曜社 二〇〇二年
- ヒリス・ローリイ著『帝国日本陸軍』
日本経済評論社 二〇〇二年
- リチャード・ストーリーイ著『超国家主義の心理と行動』
日本経済評論社 二〇〇三年
- ヒュー・バイアス著『昭和帝国の暗殺政治』（共訳）
刀水書房 二〇〇四年
- T・A・ピットソン著『敗戦と民主化』
慶應義塾大学出版会 二〇〇五年
- W・フライシャー著『太平洋戦争にいたる道』
刀水書房 二〇〇六年
- 三、法学研究・論文
- 「現代政治と利益集団（一）——その理論的考察——」
第三十五卷第九号 一九六二年
- 「現代政治と利益集団（二、完）——その理論的考察——」
第三十五卷第十号 一九六二年
- 「政治的行動論的研究——その展開と問題——」
第三十七卷第二号 一九六四年
- 「政治的近代化の理論と問題」
第三十七卷第十一号 一九六四年
- 「政治発展の概念とその分析方法」
第三十九卷第四号 一九六六年

「新興諸国における官僚制の研究」

「政治文化概念の成立と展開」

「政治における発展と統合」

「参加民主主義論序説」

「政治科学批判への一視角」

「政治学における行動論以後」

「文化政治論への構想」

「民族再考——エスニシテイの政治学序説」

「政治社会の構造変化——インタレスト社会からニーズ社会へ——」

「ネガティブパラダイムとしての政治学——一つの政治学論」

「森戸事件と黎明運動」

「政治——人間の人間の利用のために——」

法学研究・書評

R・C・マクリデイス「比較分析における利益集団」

R・C・マクリデイス、B・E・ブラウン共編『比較政治学論文集』

N・リーマー著『民主主義理論の復活』

B・E・ブラウン著『比較政治学の新方向』

H・エクシュタイン著『安定したデモクラシーの一理論』

C・ギャツ編『古い社会と新しい国家』

カール・W・ドイッチュ、ウイリアム・J・ウォルツ共編『国家建設』

第四十卷第二号 一九六七年

第四十三卷第一号 一九七〇年

第四十四卷第三号 一九七一年

第四十五卷第八号 一九七二年

第四十九卷第九号 一九七六年

第五十卷第十二号 一九七七年

第五十二卷第九号 一九七九年

第五十七卷第一号 一九八四年

第五十八卷第二号 一九八五年

第六十一卷第五号 一九八八年

第六十三卷第一号 一九九〇年

第六十八卷第二号 一九九五年

第三十五卷第二号 一九六二年

第三十五卷第七号 一九六二年

第三十六卷第二号 一九六三年

第三十六卷第五号 一九六三年

第三十六卷第九号 一九六三年

第三十七卷第五号 一九六四年

第三十八卷第二号 一九六五年

- | | | |
|---|-----------|-------|
| 篠原一、永井陽之助編『現代政治学入門』 | 第三十八巻第六号 | 一九六五年 |
| I・スワードロウ編『開発行政』 | 第三十九巻第五号 | 一九六六年 |
| K・フォン・ボリス編『新興諸国』 | 第三十九巻第八号 | 一九六六年 |
| M・ジャン・ヴィッツ著『新興諸国の政治発展における軍隊』 | 第四十巻第四号 | 一九六七年 |
| H・V・ワイズマン著『政治体系』〔連名〕 | 第四十巻第七号 | 一九六七年 |
| R・E・ジョーンズ著『政治の機能分析』 | 第四十一巻第四号 | 一九六八年 |
| 山川雄巳著『政治体系理論』 | 第四十一巻第九号 | 一九六八年 |
| 白鳥令著『政治発展論』 | 第四十二巻第一号 | 一九六九年 |
| 谷川栄彦著『東南アジア民族解放運動史』 | 第四十二巻第七号 | 一九六九年 |
| L・W・パイ、S・ヴァーバ共編『政治文化と政治発展』 | 第四十三巻第七号 | 一九七〇年 |
| 秋元律郎著『現代都市の権力構造』 | 第四十四巻第六号 | 一九七一年 |
| 中村義知著『現代の政治——その論理と構造——』 | 第四十四巻第十一号 | 一九七一年 |
| R・J・プランジャー著『現代政治における権力と参加』、G・シャープ著『武器なき市民の抵抗』 | 第四十五巻第十一号 | 一九七二年 |
| 稲上毅著『現代社会学と歴史意識』 | 第四十七巻第七号 | 一九七四年 |
| 秋元律郎著『政治社会学——現代社会における権力と参加』 | 第四十七巻第十号 | 一九七四年 |
| H・D・ダンカン著『シンボルと社会』 | 第四十九巻第六号 | 一九七六年 |
| 篠原一著『市民参加』 | 第五十巻第八号 | 一九七七年 |
| J・R・ラベッツ著『批判的科学——産業化科学の批判のために』 | 第五十一巻第八号 | 一九七八年 |
| 石田雄著『現代政治の組織と象徴——戦後史への政治学的接近——』 | 第五十二巻第二号 | 一九七九年 |
| 今永清二著『福沢諭吉の思想形成』 | 第五十二巻第八号 | 一九七九年 |

坂田稔著『ユースカルチュア史——若者文化と若者意識——』

第五十三卷第三号 一九八〇年

渡辺京二著『日本コミュニケーション主義の系譜』

第五十四卷第二号 一九八一年

野村浩一著『近代日本の中国認識』

第五十四卷第十二号 一九八一年

石田雄著『周辺から』の思考』

第五十五卷第二号 一九八二年

綾部恒雄編『アメリカ民族文化の研究——エスニシティとアイデンティティ』

第五十六卷第六号 一九八三年

金石範著『「在日」の思想』

第五十六卷第十号 一九八三年

森幹郎著『政策視点の老年学』、『政策老年学』

第五十七卷第十号 一九八四年

篠原一著『ライブリー・ポリティクス——生活主体の新しい政治スタイルを求めて』

第五十九卷第三号 一九八六年

坂口吉雄著『天皇親政——明治期の天皇観』

第六十二卷第三号 一九八九年

『近代日本知識人のアメリカ認識 澤田次郎著』『近代日本人のアメリカ観——日露戦争以後を中心に——』、

第七十四卷第十一号 二〇〇一年

長谷川雄一著『大正期日本のアメリカ認識』

第七十四卷第十一号 二〇〇一年

法学研究・翻訳

曹瑛煥「分断国家と再統一問題——政策形成に対する理論的有意性をもとめて——」

第四十四卷第八号 一九七一年

A・レイブハルト「南アフリカ多元社会にたいする選択肢としての連邦・連合・多極共存」

第五十三卷第五号 一九八〇年

ヤニス・キナス「多元主義と《南北》体制」

第五十五卷第三号 一九八二年

H・J・ウィーアルダ「非自国中心主義の発展理論を求めて

第五十五卷第九号 一九八二年

——第三世界からのもう一つの構想——」

第五十五卷第九号 一九八二年

クリスチャン・ベイ「災厄としての自由

——西欧世界における自由主義的個人主義の場合」

第六十一巻第六号 一九八八年

法学研究・資料

「政治体制」論の展開——G・A・アームンドの論文をめぐって」

第三十九巻第一号 一九六六年

「政治体系分類論と発展弁証法——F・W・リッゲス論文をめぐって——」

第四十四巻第四号 一九七一年

「アメリカ政治学会年次大会提出論文目録 一九五六一—一九六八年」〔連名〕

第四十九巻第十二号 一九七六年

D・ジョン・グロウプ「人種—民族論争——二つの理論的アプローチの国際分析」

第五十七巻第六号 一九八四年

ヒュー・バイアス「日本問題」(共訳)

第七十三巻第五号 二〇〇〇年

ヒュー・バイアス「敵国日本(一) その強さと脆さ」(共訳)

第七十四巻第一号 二〇〇一年

ヒュー・バイアス「敵国日本(二・完) その強さと脆さ」(共訳)

第七十四巻第二号 二〇〇一年

T・A・ピツソン「日本におけるファシズムの抬頭」

第七十八巻第二号 二〇〇五年

ケネス・W・コールグローブ「日本のミリタリズム」(一)

第七十九巻第二号 二〇〇六年

ケネス・W・コールグローブ「日本のミリタリズム」(二・完)

第七十九巻第三号 二〇〇六年

ケネス・W・コールグローブ「全体主義国家としての日本」

第八十巻第七号 二〇〇七年

四、法学研究以外・論文

「新興諸国における政治と軍部」

慶應義塾大学地域研究グループ著『変動期における軍部と軍隊』(慶應通信)

一九六八年

「都市のデモクラシーと革新の論理」

『潮』別冊「日本の将来」秋季号

一九六九年

「沖繩」を考える」

『週刊読書人』二月九日 一九七〇年

- 「現代政治における変動の意義について」
 「現代政治学の成立と展開」
 「政治文化と政治変動」
 「アメリカ社会学は状況の現象化が得意」
 「人間の可能性としての民主主義」
 「三権分立の神話と可能性」
 「政治学の学び方」
 「文化と文明の論理」
 「現代政治学における比較研究の展開」
- 一九七一年度年報政治学『比較政治分析とその方法』（岩波書店）一九七二年
- 「現代市民の政治理論を求めて」
 「返ってくる沖繩、返ってこない沖繩人」
 「動員と参加の政治力学」
 「変転する政治学の行くえ」
 「政府組織と市民運動」
 「軍事独裁政権成立のメカニズム」
 「政治変動の現代理論を求めて」
 「革新政治の基本構造」
 「政策の革新と住民運動の可能性」
 「民主主義と市民運動」
 「原理としての民主主義の再生と創造」
- 「琉大法学」第一一号 一九七〇年
 I・デ・ソラ・プール編『現代政治学の思想と方法』（勁草書房）一九七〇年
 共編著『現代社会と政治体系』（時潮社）
 『月刊対話』四月号 一九七一年
 『経済論壇』一七卷九月号 一九七一年
 『三色旗』二八二号 一九七一年
 『三色旗』二八五号 一九七一年
 『潮』別冊「日本の将来」冬季号 一九七一年
- 一九七一年度年報政治学『比較政治分析とその方法』（岩波書店）一九七二年
- 『市民』七号 一九七二年
 『週刊読書人』五月一五日 一九七二年
 『三色旗』二九四号 一九七二年
 『朝日ジャーナル』八月三十一日 一九七三年
 『世界政経』八月号 一九七三年
 『アジア』一二月号 一九七三年
 未発表 一九七三年
 『公明』一月号 一九七四年
 『都市問題』六五卷六号 一九七四年
 『新日本』一〇月号 一九七四年
 『公明』一〇月号 一九七四年

- | | | |
|----------------------|----------------------------------|-------|
| 「参加と動員の政治動学」 | 市井三郎、鶴見和子編『思想の冒険』（筑摩書房） | 一九七四年 |
| 「社会主義体制の比較研究」 | 徳田徳之、辻村明編『中ソ社会主義の政治動態』（アジア経済研究所） | 一九七四年 |
| 「参加政治の基本構造」 | 『世界政経』四月号 | 一九七五年 |
| 「戦後デモクラシーの持続と変質」 | 『世界政経』九月号 | 一九七五年 |
| 「〈政治神話〉は崩壊した」 | 『月刊エコノミスト』十一月号 | 一九七五年 |
| 「政治参加と現代政治学」 | 一九七五年度年報政治学『政治参加の理論と実際』（岩波書店） | 一九七六年 |
| 「ミニマム文化の役割」 | 『世界政経』二月号 | 一九七六年 |
| 「『人間』の存続のための『人間』の協同」 | 『週刊読書人』四月二日 | 一九七六年 |
| 「議会制民主主義を生かすもの」 | 『公明』五月号 | 一九七六年 |
| 「日常性の政治学と水俣」 | 『公明新聞』一〇月二日、五日 | 一九七六年 |
| 「政治参加の現代的基点」 | 共編著『デモクラシーの構造』（日本放送出版協会） | 一九七六年 |
| 「水俣と私」 | 『西日本新聞』二月二日 | 一九七七年 |
| 「政治的想像力をどうつちかうか」 | 『思想の科学』一二月号 | 一九七七年 |
| 「都市における市民運動」 | 白鳥令編『保守体制』下巻（東洋経済新報社） | 一九七七年 |
| 「日本型革新に可能性はあるか」 | 『思想の科学』四月号 | 一九七七年 |
| 「水俣へ、水俣から」 | 『思想の科学』六月号 | 一九七七年 |
| 「政治における理想と現実」 | 『公明』八月号 | 一九七七年 |
| 「戦後史における進歩と反動」 | 『世界』一月号 | 一九七九年 |
| 「国民分断のなかでの政治の回生」 | 『世界』一〇月号 | 一九七九年 |
| 「『ひっぺがし人間』のすすめ」 | 『朝日ジャーナル』三月二五日 | 一九八〇年 |
| 「国家の時代と戦後民主主義の転生」 | 『朝日ジャーナル』五月二六日 | 一九八〇年 |

- 「未完の革命としての戦後民主主義」
 「ひと」でありつづけるために」
 「『企業の社会的責任』の政治学的意味」
 「危機に対応する民主の論脈」
 「水俣・下下戦記」
 「第三世界としてのアジアへ」
 「〈小さな政府〉の考え方」
 「国家と民主主義の現在」
 「民族の基層」
 「開発と民主主義は両立可能か」
 「成長政治からの脱却」
 「現状打破の政治論」
 「生き方としての日本国憲法」
 「戦後政治の組み替え」
 「中曽根政権の『囲い込み構造』」
 「靖国『公式化』への政治底流」
 「『父性支配』を断ち切る条件」
 「政治に突きつけられた問題は何か」
 「法学オリエンテーション 立法・政治コース」
 「社会科学の現在」
 「脱産業社会の政治構造」
- 『世界』六月号 一九八〇年
 『図書新聞』九月六日 一九八〇年
 『法学セミナー』増刊『現代の企業』一九八〇年
 『世界』一月号 一九八一年
 『図書新聞』一月二七日 一九八一年
 『アジア』七月 一九八一年
 『地方自治職員研修』九月 一九八一年
 『現代国家の位相と理論』(岩波書店) 一九八二年
 『世界』一月号 一九八二年
 『世界』一月号 一九八三年
 『世界』三月号 一九八三年
 『書斎の窓』三三二号 一九八三年
 『御茶の水書房』一九八三年
 『エコノミスト』三月八日 一九八三年
 『公明』一〇月号 一九八三年
 『朝日ジャーナル』一〇月二八日 一九八三年
 『公明』一二月号 一九八三年
 『法学セミナー』増刊『法学入門』一九八三年
 『書斎の窓』三三五号 一九八四年
 『法学セミナー』増刊『これからの日本の政治』一九八四年
- 秋永肇教授古稀記念論集『現代民主主義の諸問題』(御茶の水書房)
 横越英一教授退官記念論集『政治学と現代世界』(御茶の水書房)

- 「政治閉塞はどこからきているか」
 「中曾根型『協調国家』を糾弾する」
 「福沢諭吉は死んだ、福沢諭吉は生かせるか」
 「人間と社会の学としての再生を」
 「戦後史にかんする一考察」
 「新しい知識人への待望」
 「自民党国家からの解放」
 「国家は秘密をもてない」
 「高齢化社会の政治とデモクラシー——その可能性について」
- 「公明」 一二月号 一九八四年
 「エコノミスト」 一月八日 一九八五年
 「私学公論」 三月 一九八六年
 「経済セミナー」 三七四号 一九八六年
 『三田商学研究』 第二九卷第二号 一九八六年
 『私学公論』 七月 一九八六年
 『月刊社会党』 三七〇号 一九八六年
 『月刊社会党』 三七六号 一九八六年
- 共編著『講座政治学』Ⅲ（政治過程）（三嶺書房） 一九八六年
 慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』 第三卷 一九八六年
 共編著『昭和同時代を生きる』 一九八六年
 飯岡秀夫、宮本純男編『近代』とその開削（清水弘文堂） 一九八七年
 『公明』 七月号 一九八七年
 『慶應塾生新聞』 一月二〇日 一九八七年
 慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』 第四卷 一九八七年
 『公明』 一月号 一九八八年
 『私学公論』 二月 一九八八年
 『思想の科学』 七月号 一九八八年
 『公明』 一月号 一九八八年
 『塾』 一二月 一九八八年
- 「いま、人間の進歩を考える」
 「沖繩 一九八七年夏」
 「沖繩県費第一回留学生」
 「何に馴れてしまったのか」
 「第三の開国が意味するもの」
 「戦後日本のテロの系譜」
 「権力システムと『政治の死』」
 「未練たらしい欲張りのはなし」

- 「未然の日本近代——天皇制を手がかりに」
 「国家社会大学から人間史的大学へ——新しい課題設定のために」
 「すり替えられた『はじめ』と『政治改革』」
 「私学経営ということ」
 「学問・学者・大学」
 「政治の流れと社会の意識変化」
 「情報化の中の文盲たち——現実主義と大学」
 「人間が時代を創ることへの希望」
 「太平洋戦争をめぐるって」
 「福沢先生という人」
 「日本からの起点」
 「憲政一〇年の日本と日本人」
 「新しい啓蒙の時代へ」
 「自助としての学問」
 「ミニ公衆」（自決責任をもつ大衆）よ、いでよ！」
 「家族に教育は可能か」
 「ソ連革命を目撃して感あり」
 「情報と情報社会への疑問、そして教育の課題」
 「学長マイナス三年」
 「現代世界と政治理論」
 「民族現象の現在」
- 『私学公論』一月 一九八九年
 『私学公論』六月 一九八九年
 『エコノミスト』六月二十七日 一九八九年
 『私学公論』八月 一九八九年
 『私学公論』一〇月 一九八九年
 『新聞研究』四五九号 一九八九年
 『私学公論』一二月 一九八九年
 『私学公論』八月 一九九〇年
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『三田評論』五月 一九九〇年
 『私学公論』六月 一九九〇年
 『私学公論』一二月 一九九〇年
 『エコノミスト』一月二十九日 一九九一年
 『私学公論』二月 一九九一年
 『私学公論』九月 一九九一年
 『私学公論』一〇月 一九九一年
 『私学公論』十一月 一九九一年
 『私学公論』十二月 一九九二年
- 『三田学会雑誌』第八二巻特別号Ⅱ
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『私学公論』四月 一九九〇年
 『三田評論』五月 一九九〇年
 『私学公論』六月 一九九〇年
 『私学公論』一二月 一九九〇年
 『エコノミスト』一月二十九日 一九九一年
 『私学公論』二月 一九九一年
 『私学公論』九月 一九九一年
 『私学公論』一〇月 一九九一年
 『私学公論』十一月 一九九一年
 『私学公論』十二月 一九九二年
- 『政治的なもの今』（三嶺書房）
 『私学公論』二月 一九九二年

- 「社会改革としての生涯教育」
 「大学を人に近づける——一般教育考」
 「学生は大学文化の創造者」
 「大学が地域をもつということ」
 「『自民党国家』の悲劇」
 「板倉卓造の初期政治論」
 「見せかけの多党化 ふえなかつた選択肢」
 「人類史の中の国家——共通感覚の普遍化に向けて」
 「五五年体制の終焉」
 「政治——進路選択が『政策論争』にすり替わつた自民総裁選——」
 「丸山真男氏死去——『普遍的なるもの』を学んだ——」
 「シリーズ議会政治——政治的なものへの回帰——」
 「新聞研究所五〇周年記念 福沢論吉と新聞」
 「少年H」
 「随想 肩書」
 「随想 何かが失われた」
 「ウェーランド経済書講述記念講演 福澤論吉と長岡藩——小林雄七郎を中心として——」
 「人間と社会と大学と」
 「随想 生きごま」
 「再見、山川君」（山川雄巳先生追悼集）
- 「私学公論」三月 一九九二年
 「私学公論」六月 一九九二年
 「私学公論」七月 一九九二年
 「私学公論」一〇月 一九九二年
 「エコノミスト」七月二七日 一九九二年
 「エコノミスト」七月二七日 一九九二年
 「近代日本研究」第九卷 一九九二年
 「エコノミスト」七月二七日 一九九三年
 「週刊読書人」九月一三日 一九九三年
 「新聞研究」五〇六号 一九九三年
 「エコノミスト」一〇月三日 一九九五年
 「エコノミスト」九月三日 一九九六年
 「世界と議会」一〇月号 一九九六年
 「三田評論」一二月号 一九九六年
 「私学公論」一二月号 一九九九年
 「私学公論」一二月号 一九九九年
 「私学公論」三月号 二〇〇〇年
 「私学公論」五月号 二〇〇〇年
 「三田評論」七月号 二〇〇〇年
 「私学公論」 二〇〇一年
 「私学公論」 二〇〇三年
 「私学公論」 二〇〇三年
 「関西大学法学会誌」 二〇〇三年

「せめて『近代』」

『慶應義塾福澤研究センター通信』第五号 二〇〇六年

法学研究以外・翻訳

D・E・アプター「イデオロギーと不満」

慶應義塾大学法学部地域研究グループ訳、D・E・アプター編『イデオロギーと現代政治』（慶應通信） 一九七五年

ランドルフ・S・ダビッド「開発独裁と民衆運動——フィリピンの経験について」

『エコノミスト』八月七日 一九九四年

ジョージ・サムソン「日本のリベラリズム」

慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』第一〇巻 一九九三年

法学研究以外・書評

阪谷芳直著『三代の系譜』

『朝日ジャーナル』二月二二日 一九八〇年

東京大学社会科学研究所編『運動と抵抗』上中下

『朝日ジャーナル』六月二〇日 一九八〇年

渡辺京二著『日本コンミュニオン主義の系譜』

『朝日ジャーナル』一月二八日 一九八〇年

池田浩士著『闇の文化史——モンタージュ一九二〇年代』

『朝日ジャーナル』三月二三日 一九八一年

馬場伸也著『アイデンティティの国際政治学』、前山隆著『非相統者の精神史』

『朝日ジャーナル』六月一九日 一九八一年

スジャヤトモコ著『開発と自由——発展途上国の立場から』、R・スタンペンハーゲン著

『朝日ジャーナル』七月二四日 一九八一年

『開発と農民社会——ラテンアメリカ社会の構造と変動』

『朝日ジャーナル』七月二四日 一九八二年

永井陽之著『移民の日本「回帰運動」』

『公明』八月号 一九八五年

一九八五年回顧

『週刊読書人』二月二三日 一九八五年

一九八六年回顧
杉森久英著『明治天皇』

『週刊読書人』二月二三日 一九八六年
『週刊読書人』二月二日 一九八七年

法学研究以外・資料紹介

T・A・ピットソン「一九三〇年代における独裁制指向」

慶應義塾福澤研究センター『近代日本研究』第二二卷 二〇〇一年

法学研究以外・解題

『嗚呼二月二十六日』（鈴木梅四郎著）

慶應義塾福澤研究センター近代日本研究資料（一） 一九八七年

『島田三郎全集』第六卷

龍溪書舎 一九八九年

『黎明講演集』（黎明会）第一卷

龍溪書舎 一九九〇年

『現代社会問題研究』（日本社会学院調査部編）第二五卷

龍溪書舎 一九九三年

『藩閥之将来 附教育之大計』（外山正一著）

慶應義塾福澤研究センター近代日本研究資料（五） 一九九四年

『復刻薩長土肥』（小林雄七郎著）

慶應義塾福澤研究センター近代日本研究資料（八） 二〇〇一年

『與謝野晶子評論著作集』第二二卷所収「与謝野晶子の方法と思惟」

龍溪書舎 二〇〇三年

法学研究以外・講義録

「敗戦から戦後へ」

『慶應義塾OCW（オープンコースウェア）』 二〇〇六年